

精霊の宿る世界

— バテンボ民族調査 —

1983年

室沢治久

暗闇に男の声が響く。老若男女、皆、声を潜めて彼の話に耳を傾けている。彼の声だけが静寂を破っている。我々には、彼の話がわからない。不安と緊張の時が流れる。

我々が、バテンボキャンプに入って一週間めの夜のことである。白人としては初めての長期滞在中で、近頃の獲物がとれなくなった原因を、我々の滞在に求めたようだ。「白人の長期滞在中に、精霊 (Spirit) が怒って、獲物がとれないのだ。」と男は言っているらしい。通訳兼ガイドのジョンが、説明をしてくれた。

彼らバテンボと名乗る人々は、ピグミーやブッシュマンと同様に、今日においても狩猟採集生活を営み続けている。ただ、アフリカの発展途上国ザイールの奥地に住み、移動生活を送っているためか、それとも無文字社会であるがためか、未だに注目されていない。記録や記述のない、その生活の未解明な人々であった。近くの農耕民からは「動物」と呼ばれ、蔑まされている人々が、このアフリカ大陸の奥に存在していたのだ。

我々が、そんな彼らの存在を知ったのは、去年のザイール河源頭流域踏査隊の報告によるものである。

「我々が出会った彼らは、カサマ村より30分ばかり森に入った地で狩猟キャンプを開く、一族と呼べそうな小さな集まりだった。彼らは乾期になると、カサマ村近くを流れる川の乾上がりより塩を採取するため、毎年そこに来るといふ。」

この報告文と、松原、蓮本両先輩の話に興味を持ち、アフリカ関係の資料を集めたり、アフリカに詳しい方々にお会いし、狩猟採集民バテンボについての情報を得ようとした。しかし、バテンボに関する資料は農耕民のものばかりで、狩猟採集民としての資料は皆無に等しく、去年の報告書が唯一のものであった。

このように、バテンボに関する情報収集や、アフリカについての知識を蓄えるためのデスクワークを進めていった。また一方、国内における内陸塩調査も、我々の調査技術トレーニングとして考え並行させた。しかしながら、当初は四人で進めていたこの計画も、一人、二人と脱落し、結局、室沢、横山の二人だけになってしまった。

尚、この計画は、知られざる民族、記録や記述の無い未解明な社会を対象としたものである。そして、現地の人々と生活を共にしていくなかで、「ラボア(人間交流)」を確立し、人々とその現状を捉えるとともに、人類社会に普遍なるものを求め、自然と融合した素朴な人間像を捉えたいという趣旨のもとに行なわれた。

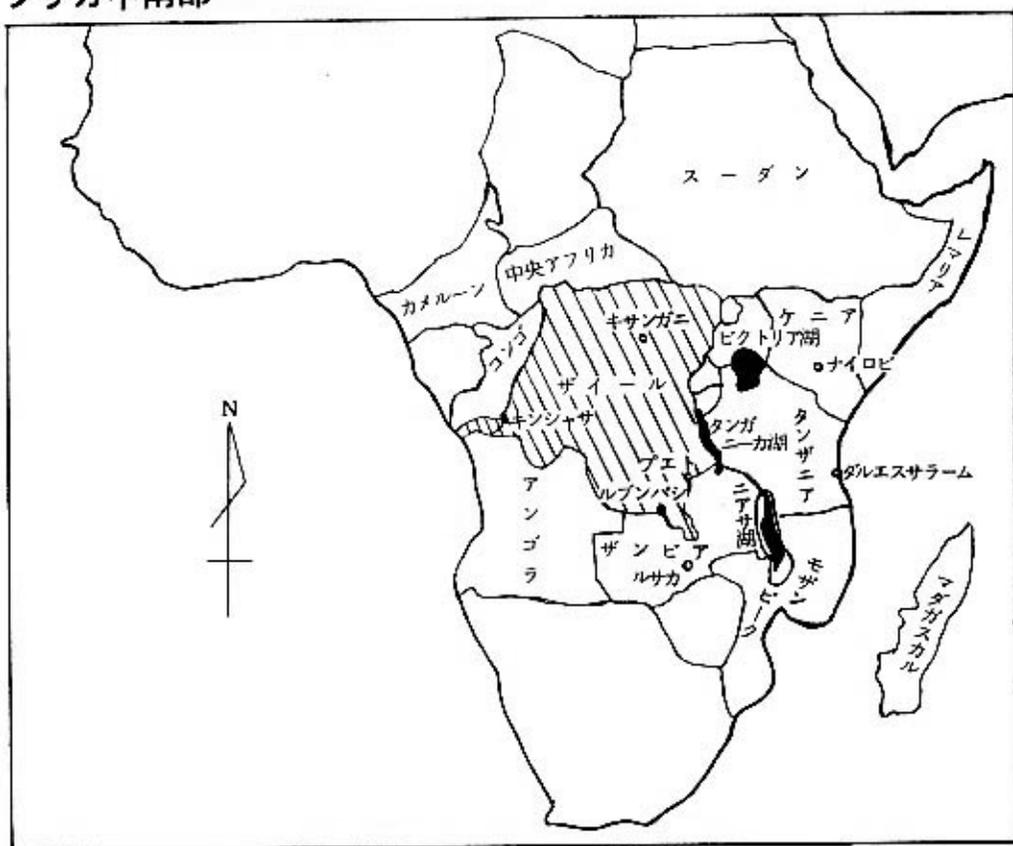
6月25日、期待と不安の中で、PIA（パキスタン航空）に乗り込み、成田（日本）を発ち、アフリカへ向った。ところが、最初の給油地であるマニラ（フィリピン）でトラブルが生じた。給油を終え、「いざ出発」と空港を飛びたっはいいが、エンジンが火をふき出したらしく、再度着陸する。待ち合い室にて待たされること約1時間。しかし、すぐには飛び立てそうもなく、航空会社の用意してくれたホテルへ避難する。翌朝、今日は飛べるかどうかPIAに聞いてみるが、無理とのことであった。

27日、夜。「カラチ（パキスタン）までは行けるが、それ以後の接続はわからない」、という問題を抱えたままマニラ発を決意した。予想外の

出来事に、今後不安を抱きつつの出発となった。28日早朝、カラチに着いたが、やはり接続が悪く、30日の夕方までナイロビ（ケニア）行きの便は無かった。しかたなく、航空会社の用意してくれたホテルで待機するのだが、計画の遅れが心配であり、バテンボキャンプに辿り着けるのかどうか不安は募るばかりである。しかし、市内観光や英語の実習等は幸いであった。予定外の貴重な体験が出来たことも事実である。

7月1日の夜中、（朝2時）、ナイロビ（ケニア）にやっと着くことができた。日本を出て6日めにアフリカの大地に足をおろすことができ、なぜか感動を感じる我々であった。

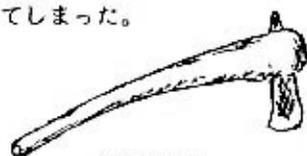
アフリカ中南部



ナイロビは高原のためか、夜中であったがためか、Tシャツ、タンパン、サンダル姿では寒く、あわてて服を着込まねばならなかった。これも、アフリカは暑い国という先入感があったからかもしれない。そして、安宿イクバルへ車を走らせ、昨日までの豪華なホテル生活とはおさらばする。イクバルに荷物を預け、フォーク歌手の河島氏とアフリカに無事着けたことを祝い、グリーンバーへ飲みに行く。午後、ザンビアのビザをとりに、ザンビアハイコミッションへ行くが、大学の発行してくれた英文証明書の威力か、簡単に取ることができた。

7月2日昼、ナイロビからルサカ(ザンビア)へKQ420(ケニア航空)で向かう。3時間弱でルサカに着いたが、ここでハプニングが生じる。我々の荷物が届いていないのである。いくら待っても出てこないのだ。しかたなく、航空会社に紛失届を書き、我々のザック2つをチェックしてくれるよう頼む。しかし、あったとしても、5日の便までは無理とのこと。週2便しかないのではしかたがない。ザックが届かない場合を考え、悩んでいた二人を、青年海外協力隊員の小瀬川氏が拾ってくれ、氏の宅で泊めてもらえることになる。これで、物価の高い都市での滞在問題が解決した。7月5日、無事荷物が届き7月7日の朝、バスにてチンゴラへ向かった。夕方、チンゴラに着き、三菱商事の高橋氏の家に泊めて頂く。7月8日、氏の友人に車でザイール、カスンバレサのSODIMIZAまで乗せて頂き、途中の国境も簡単に通過することができた。7月9日、昼、ルブンバシ着。SODIMIZAのルサカオフィスで日本へテレックスを打って頂く。当初の計画よりも、一週間程遅れてしまった。早速、通訳兼ガイドのジョンを捜しに行ったが、家族の者の話では、彼は今、カセンガに行っているとのことであった。

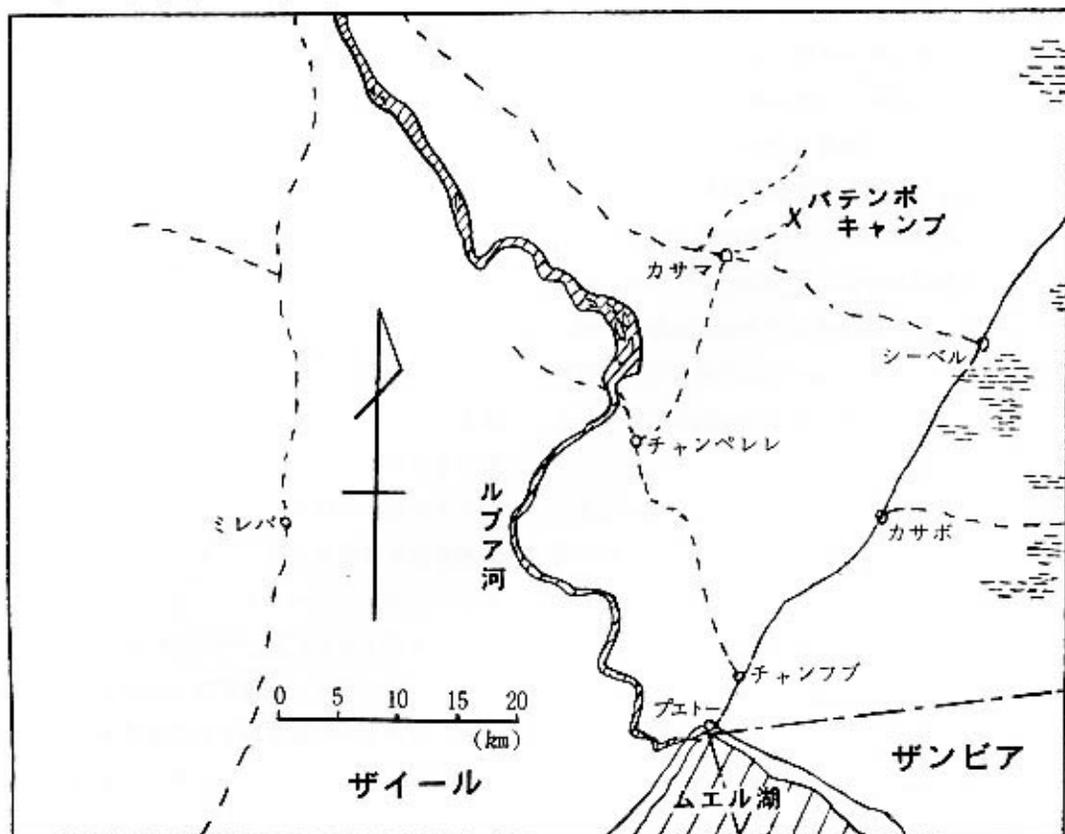
7月13日、ジョンが我々の滞在しているSODIMIZAの貸家に訪ねてきた。明日は二人だけでも出発しようと考えていただけに、思わず彼の手を握ってしまった。



HATEMO

7月14日、今日から奥地へと向かうわけだ。トラックの荷台に、動物や荷物と同様に人がつめ込まれ、電気も水道も無い世界カセンガへ向かった。5時間程、赤土の道をトラックに揺られ、カセンガに着いた時には、皆、ほこりだらけで、黒人が赤白人に見えるほどであった。とにかく、しんどいルブンバシへカセンガ間のトラック行であった。7月15日、朝、プエトー行きの汽船に乗り込む。この船も、制限が無いかのように、人や動物、荷物がつめ込まれての出発であった。7月16日の昼過ぎ、プエトーに着く。7月18日、朝、カサマを目指して歩き始める。2つのザックを3人で交代しながら進むのだが、夕方、チャンベレに着いた時には、3人ともぐったりの状態であった。翌朝、また歩き始めるのだが、3人も疲れの色が見える。やっとな、カサマに辿り着いた時には、両足のマメはつぶれ、靴下にはその跡が黦章のように残されていた。夕方、バテンボを統括するというカサマ村のチーフに会う。日本からの土産や大学の証明書を渡し、バテンボキャンプに入りたい旨をジョンに説明してもらう。我々の土産が気に入ったのか、それとも大学(University)という文字の威力か、快く我々を受け入れてくれるようだ。明日、バテンボの人を我々のために、ブッシュの中から呼び出してくれることになった。7月20日、バテンボのチーフが、わざわざ迎えに来てくれた。

バテンボキャンプ位置概略



彼とブッシュの中の小道を歩くこと、2時間半やっと目的地に辿り着くことができた。バテンボの人々が生活するキャンプに来たのだ。日本を出発して25日目に、ついに、狩猟を生業とする人人に会えた。大阪を出発する時には、移動しているバテンボキャンプまで辿り着けないのでは、という不安もあった。しかし、目の前に草ぶきの小屋があり、粗末な破れの目立つ服を着ている人、裸の人達が、我々のところに集まってくるのは、たまたまなく、うれしいものであり、筆舌に尽しがたい感動があった。

我々がキャンプに入ると、まず、バギギの家に案内された。バギギとは、バテンボキャンプに来て商売をしていく農耕民のことで、塩・タバコの葉・キャッサバ(イモ)・矢先(メタル)などを

キャンプに持ち込んでいる人々のことだ。彼らによって、近代文明の波がキャンプ内に押し寄せているのだ。しかし、大抵のバギギはキャンプ内に家を持っておらず、たき火を囲んで夜空の下に寝ている。我々の案内された家は、バギギでも、カサマのチーフのメッセンジャーの役を務める者の家で、自分自身で作ったそうである。この家もバテンボの人々と同様、木と草だけを利用した粗末なもので、家の中で火を使えば、2人しか寝ることができない小さなものだ。この家を利用して、囲い(円周約15mの長円型)が木で組まれており、そこを我々の拠点(基地)とした。ここが、これから4人(室沢・横山・ジョン・家の持ち主のシリリョ)で生活をする場所となった。

囲いの中央には絶えず火が燃やされており、その火を取り囲むようにして我々は座し、集まってきたバテンボの人々に土産を贈ることにした。チーフから順々に土産を渡していくわけだが、若者達はハンティングに行っているらしく、老人達と女・子供がほとんどであった。母親達は子供を抱きながら、挨拶をするために我々に近づいてきた。そして、その子供にも手を出させ、挨拶をさせた。挨拶の方法は、右手で握手をするわけだが、必ず左手は右腕の肘に添えられており、ちょっと腰を落として握手をしていた。

ここで、印象的であったのは、女の人の顔に彫られた刺青だ。後になってわかったのであるが、昔はバテンボのシンボルとして刺青があったらしい。男女とも、顔面だけでなく、身体にも彫っていたようだ。しかし、今日においてはファッションの意味しか持たず、義務づけられてはいないらしい。この刺青が、バテンボとバギギの区別をするための目印となった。

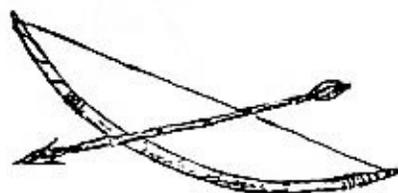
また、土産の贈り方も、なかなか難しい。キャンプの代表者にまとめて渡してはならず、少しでも良いから、全員に行き渡るように配らねばならない。チーフや尊敬を受けている人々と、他の人々との間に土産の差をつけても構わないのであるが——。これはAfrican Feelingらしく、行き渡らなかった人々が、Bad Feelingになることを恐れてのことだ。とにかく、我々がJAPANという遠いところから来た友達で、しばらく一緒に生活したい旨をみんなにわかってもらい、バテンボキャンプでの生活が始まった。言葉、肌の色、考え方、生活習慣などのほとんどを異にする人々との生活が始まったのである。

バテンボの人々の身長は、成人男子で150cm～165cm、成人女子で145cm～155cmぐらいで太っている人は見かけなかった。肌の色は黒く、みんなとことなく似ている顔立ちであった。これは、親族を調べてみてやっと納得したのだが、このキャンプのメンバーのほとんどが何らかの親類関係を持っていたからである。

彼らは文字を持たず、彼らの間では話し言葉のテンボ語で用がなされている。バギギなどとは、ベンバ・タブア・ルバとテンボのミックス語などを使用しているようだ。通訳の話では、3つの言葉を状況に応じて駆使し、理解していくそうだ。我々と通訳の間では英語で会話がなされた。

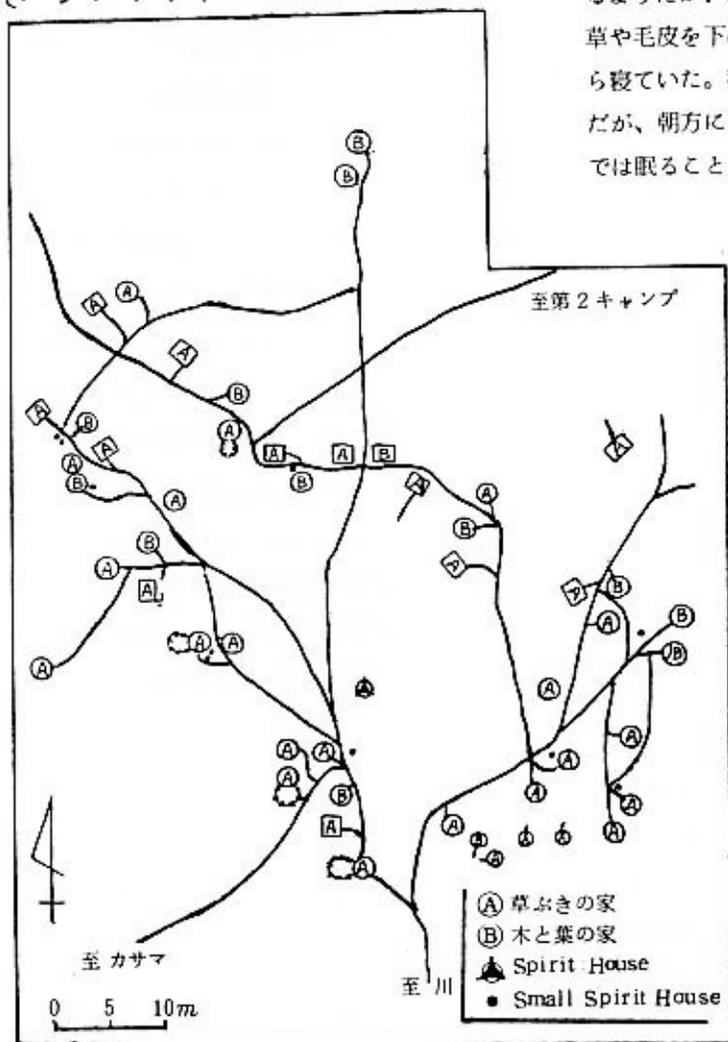
バテンボの男達は毎日、弓と矢を持って狩猟に出かけていく。この時に、ネットハンティングを行うための偵察もかねている。動物の足跡がいくつも集まっている場所を見つけるとキャンプに応援を頼む。ネットハンティングになった場合、女や子供も参加し、キャンプ員のほとんどが出かけていく。採集に関しては常時行なわれていないようだ。時々、野生のキャッサバなどを見つけては採ってくる程度らしい。

狩猟によって得た肉は彼ら自身で食べる他、農耕民(バギギ)からキャッサバや衣服などを手に入れるために使われる。物々交換が主ではあるが時には貨幣による交換もなされていた。



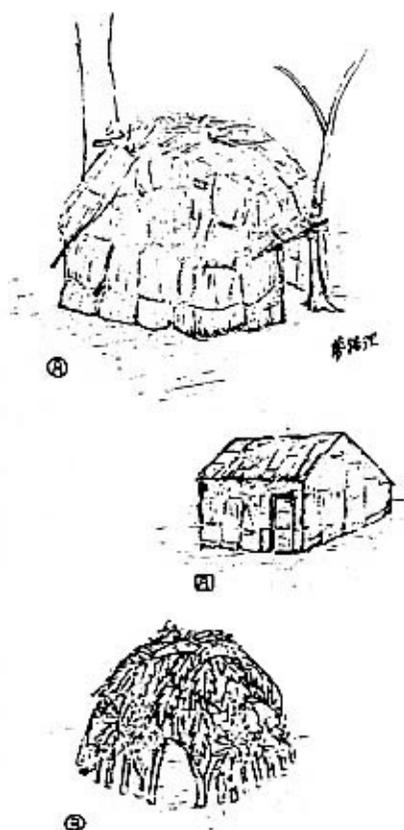
このキャンプの成員数はチーフ自身も把握しておらず、我々自身で各家を回るより知りようがなかった。その結果、このバテンボの成員数は77名であった。その他にバギギが常時5～6人、入れかわり滞在していた。これは農耕民から聞いた話だが、バテンボと名乗る狩猟民は2000人程いるらしい。カサマを中心として、東はタンガニーカ湖、西はキアンピの辺までの山岳地域を移動しているようだ。雨期になると、彼らはカサマ村の近くでキャンプ生活を送るらしい。

〔バテンボキャンプ概略図〕



キャンプに建つ家の数は40～50戸ぐらいで、スピリットハウス（精霊の家）を中心にキャンプが成り立っていた。とにかく、この社会ではスピリットが支配しており、ありとあらゆる諸現象はスピリットによるものと考えられている。そして、スピリットは神聖なものであると同時に恐いものとして祀られていた。人々にとって、精神的拠り所とでも言おうか、電気も水道も、トイレも文字も無い世界では、この様なスピリットに頼らざるをえないのだろう。

既婚の者や若い女の子、幼児は家の中で寝ているようだが、未婚の若い男や子供は外で寝ていた。草や毛皮を下に敷き、上半身は裸で火を囲みながら寝ていた。我々も、常に2人は外で寝ていたのだが、朝方には8度近くまで冷え込み、寝袋なしでは眠ることができなかった。



キャンプに入って初日の夜、我々を歓迎するかのようにタムタムを叩き、歌と踊りのもてなしがあった。フラッシュをたく度に歓声があがり、楽しい一時であった。

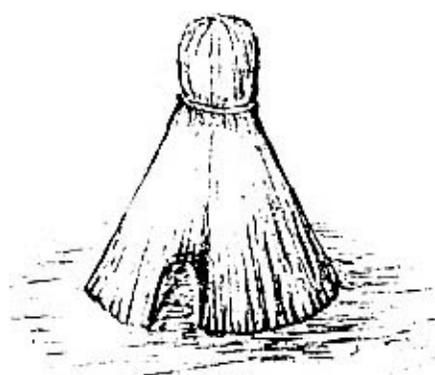
我々の活動はまず、単語の収録から始め、それと並行して生活様式の記録や記述をしていった。社会組織に関しては通訳を介して調査を進めた。調査のかたわらに、医療活動にも励んだ。しかしながら、我々の医療知識ではどうしようもない患者が時々やって来て、顔をしかめさせられた。切り傷程度ならば問題は無いのだが、眼球が白くなっている人などには、気休め程度の治療を行うことしかできなかった。下手に治療をして悪化させ、キャンプから追い出されることを恐れていたからでもある。医療活動は人々と親しくなる反面、恐い一面を持っているので、注意を払う活動であった。それにしても、衛生面の問題とも言うおうか何処からかハエが発生していて、ちょっと目を離すと傷口に黒く群がっている。それを彼らは気にもせず、平気な顔をして追い払うことさえしないで行っているのは閉口した。

食糧問題に関しては、初めは土産のお返しであろうか、動物の片足やキャッサバをプレゼントしてくれた。しかし、それも4日程の食糧であった。それ以後は、我々の服かお金で肉などと交換し、食糧を手に入れねばならなくなった。この物々交換も、非常に気を使うものであり、夜間に人目につかないように交換がなされねばならなかった。一人とだけ物々交換をすると、他の交換できない人々がBad Feelingになるからだそうで、こっそりで行なわれた。衣服やネックレスは非常に喜ばれ、特に色つきのものに人気があった。

毎日、毎日、肉とキャッサバが材料で、調理方法をかえるだけの食事であった。焼くか煮るかの調理で、調味料は塩とピリピリ(トウガラシ)だ

けしかなく、単調なものであった。参考までに、2人ともキャンプでは下痢が便秘の毎日であった。

飲料水は川の水をそのまま使った。そして、その水で手を洗い、素手で肉やウガリに挑み、食後にまた手を洗うのだが、最初は少々抵抗のある食べ方であった。しかし、それが当然かのように、次第に慣れていく我々であった。食後の会話ではいつも日本食(寿司やお好み焼)が話題に上っていたのも事実である。



Small Spirit House

キャンプに入って8日目の夜、チーフが我々のところに来て「動物が獲れなくなった。スピリットのリアクションを恐れる」と言った。動物が獲れなかった男達がチーフのところに来て、我々、白人が長く滞在しているから獲れないのだと言っているらしい。水曜日であったので、我々が月曜日でないといわれず、日本から一緒に生活をたくて、やっと来たことを通訳してもらう。今週と、もう一週間の滞在許可をもらうが、その代りとして、スピリットに贈物をやるということで、この問題は解決した。しかし、今後も動物が獲れない日が続くと、我々の存在は非常にまずいものとなる。明日は獲れるよう祈ることしか我々には為す術がなかった。

7月30日、念願のネットハンティングに参加することができた。10時頃からキャンプの男や女・子供までが、4～5人程の集まりを作り、出かけていくのである。男はネットをかつぎ、弓と矢を持って続々と出かけて行く。我々の同行も許され、カメラを片手について行った。キャンプ地から30分程歩いたところに人々は集まっており、みんなが揃うのを待っていた。老人や女・子供・犬までも参加して、かなり大きなハンティングのようだ。総勢40人以上を数える。11時頃からネットが張られ始めた。約30分後、ブッシュを焼く火の音に混じり、勢子の声が聞こえてきた。我々は子供らとともにネットの端に待機させられ、カメラを構えていた。しかし、我々の近くからは動物が飛び出て来なかった。13時には火も消え、みんなネットを片付けて集まって来たが、何も獲れなかったようだ。また、我々の存在がまずいものになってしまった。午後、我々の同行は拒否され、再度ネットハンティングに出かけて行った。夕方近く、一匹のアンチロープが獲れたようで、かついで帰ってきた。しかし、この日以後はハンティングに連れて行ってもらえず、最初で最後のハンティング参加になってしまった。チーフや老人達に、連れて行ってくれるよう何度か頼んでみるのだが、現在のように動物が少ししか獲れない状態では無理のようだ。仮に連れて行き、もし今度も獲れなかった場合、キャンプに居られなくなると言われてしまった。動物が沢山獲れるよう祈ってみたのだが、祈りは届かなかったようだ。

今日も彼らは、弓と矢を持って動物を追っていることだろう。そして夜は、タムタムを叩きながら、楽しかったことや悲しかったことを歌っているかもしれない。「JAPANという、遠い遠い国から白人が2人やって来て、我々と同じ生活をして帰って行ったよ」と歌っているかもしれない。

約3週間の滞在で、動物を実際に獲るところを見たのは、ヘビとマルンビ(ネズミ)の2回だけであった。特に、このマルンビ捕りは興味深いものがあった。大人が3人程で穴を掘り、2時間近くをかけてやっと10cm程のマルンビ1匹をつかまえたというものだ。この執念に狩猟民らしさを見たような気がした。

通訳が非常に優秀であり、調査に関しても8月7日には一応、我々なりに納得のいく記録がとれたと思っている。その夜、明日我々が帰るということを知ってのことか、タムタムの音が聞こえてきた。21時から翌1時頃まで続く歌と踊りの宴であった。再び彼らと会えるかどうかわからないだけに、感傷的な気持ちになってしまった。

それにしても、バテンボの人々と共に生活した約3週間で、彼らの報酬を期待しない、利益を計算しない素朴さ、親切さというものをつくづく感じた。また、物が少ないために、物を大切にしているところなど、我々の物が出過ぎて氾濫している社会では見失っているものがあった。そして、相手(周囲の人々)の感情に絶えず気を使い、自分さえよければ、という我々の社会には失われてしまっているものがあった。人間らしい何かが、彼らの生活にはあったように思える。

8月8日早朝、チーフをはじめ、我々に対して特に親しくしてくれた人々に見送られ、バテンボキャンプを後にした。